奈良市における製墨業の発展と現状

2 回生　杉村亮輔

I.　はじめに

伝統的工芸品と呼ばれるものは日本全国各地に存在し、各都道府県によって指定された工芸品から 1976 年に公布された「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」に基づき、経済産業大臣が指定した工芸品まで多岐にわたっている。表 1 は(財)伝統的工芸品産業振興協会によって作成された『全国伝統的工芸品総覧』のうち平成 14 年度版、平成 18 年度版に基づき作成した、2002 年と 2007 年の奈良県の伝統的工芸品の一覧とその年生産額及び企業、従事者数をまとめたものである。ここでもっとも特徴的であるのが奈良墨である。わが国には、経済産業大臣によって伝統的工芸品に指定された墨として三重県鈴鹿市の鈴鹿墨がある（表 2）が、両者を比較しても、奈良墨の場合は墨汁などの生産額も含まれるが商業規模が非常に大きいことが特徴として挙げられる。奈良墨は経済産業大臣による指定伝統工芸品及び奈良県が指定する伝統工芸品の指定は受けていないが、古来より日本の文化と密接に関係した伝統工芸であり、現在国内で生産される墨の約 95%を生産している。本稿では奈良市と製墨業の関係性を踏まえつつ、その現状と課題について考察する。

表 1　奈良県の伝統的工芸品一覧とその年生産総額・企業数・従事者数

	年生産総額(円)		企業数		従事者数(人)	
	2002年	2007年	2002年	2007年	2002年	2007年
高山茶筌	2億8000万	6億	31	28	298	250
高山茶道具	–	–	12	7	25	–
奈良筆	8億5200万	18億	45	11	120	73
赤膚焼	2億9600万	–	6	6	36	–
吉野手漉和紙	9500万	–	17	8	38	–
奈良団扇	–	–	1	1	6	–
奈良晒	–	–	2	3	100	–
鹿角細工	–	–	3	3	5	–
木製灯籠	–	–	–	1	–	–
大塔坪杓子，栗木細工	–	–	2	1	2	–
くろたき水組木工品	–	–	–	1	–	–
吉野杉桶・樽	–	–	–	1	–	–
三宝(神具)	4億2000万	–	14	7	123	–
神酒口	–	–	–	2	–	–
大和指物	–	–	–	1	–	–
出雲人形	–	–	1	1	1	–
笠間藍染	–	–	1	1	1	–
奈良一刀彫	3億2700万	–	30	27	36	–
奈良漆器	1億1600万	–	13	7	21	–
奈良墨	16億6500万	87億8700万	21	15	420	444

（『全国伝統的工芸品総覧』より作成）

表 2　鈴鹿墨の年生産総額・企業数・従事者数（2007 年）

	年生産総額(円)	企業数	従事者数(人)
鈴鹿墨	4500万円	3	5

（『全国伝統的工芸品総覧』より作成）

II.　奈良市と製墨業の関係

表 3　製墨業の変遷

610 年(推古 18 年)	高句麗の僧曇徴が日本に製墨法を伝える
室町時代初期	興福寺二諦坊にて日本初の油煙墨が造られる
戦国時代(16 世紀末)	墨の製造が寺社から町方へと移行「墨屋」が現れる
1817(文化 14 年)	墨職組合結成(まもなく差留)
1833(天保 4 年)	墨職組合再結成
明治初期	墨職組合解散
1880(明治 13 年)	永香組結成
1883(明治 16 年)	奈良製墨組合設立
1913(大正 2 年)	奈良製墨同業組合設立
1947(昭和 22 年)	奈良製墨工業組合設立
1949(昭和 24 年)	奈良製墨協同組合設立
1958(昭和 33 年)	学校教育にて習字教育が復活
1994(平成 6 年)	県による伝統的工芸品指定を見送る
2011(平成 23 年)	奈良製墨組合を結成

（奈良製墨組合ホームページより作成）

1）奈良における製墨業の発展過程

墨造りと奈良は古来より密接な関係がある。表 3 は奈良における製墨業のおおまかな変遷を表したものである。製墨法は 610 年(推古 18 年)に高句麗の僧曇徴によって伝えられたとされている。この際伝えられた墨は松煙墨(しょうえんぼく)と言われる墨でありこれは原料に松の木を燃やして採った煤を用いた墨である。古代日本においてはこの松煙墨が一般的であり、藤原宮跡、平城宮跡から出土される木簡や土器、写経に用いられた墨は全て松煙墨であった。当時の墨は高級品であり、寺社においてのみ生産されていたと伝えられている。

この際重要となるのが興福寺との関係である。藤原氏の氏寺として建立した興福寺では墨の生産を一手に担い、興福寺二諦坊(にたいぼう)では多くの造墨手を置き、多くの墨を生産していたとされている。わが国において現在一般的となっている墨は、油煙墨(ゆえんぼく)と言われる原料に植物油を燃焼させて採った煤を用いた墨である。油煙墨は松煙墨と比較して黒味が強く品質も高いのが特徴である。この油煙墨は当初中国からの輸入品のみであり、わが国で最初の造られたのも室町時代、興福寺二諦坊であったとされている。これは当時の寺社が灯明用

の胡麻油の生産も行っており「煤(すす)」を容易に生産ができたことが要因と考えられる。この油煙墨は南都油煙と呼ばれその質の高さから奈良の墨の名声を大いに高めたとされる。

現在に通じる製墨業は戦国時代に誕生する。これは織田信長、豊臣秀吉によって天下統一がなされると共に、寺社の勢力が低下したのと同時に、商工業振興策を行ったことにより、寺社のもとで生産を行っていた職人が「墨屋」として店を構え寺院から町へと墨の生産が大きく移行したことが背景にある。この当時の墨屋は奈良市の中心部に立地し、現在に至るまで存続している店舗も複数存在している。当時の墨は筆と共に文房具として庶民の間で需要が高まったことから、奈良見物の土産品として重宝されたとされている。

その後明治期になると、製墨業者間でさらなる発展に向け組合が設立されるようになり、何度も改組を繰り返しながら、その系譜が現在まで継続して続く形となっている。奈良においてなぜ製墨業が定着したかについては、原材料の調達が容易に可能であったことが大いに影響していたと考えられる。

2）墨の生産過程とその特徴

まず墨には上で述べたように松煙墨と油煙墨があるが、ここでは現在最も一般的な油煙墨について説明する。墨の生産において特徴的なのは一般的に 10 月から 4 月にかけて行われる点である。これには原材料の一つである膠(にかわ)が大きく関係している。膠は主に牛などの動物の皮、骨や真皮を煮沸することで抽出したゼラチンを主成分としたものである。膠は専門の職人によって生産されるが、動物性蛋白質でできた膠は腐敗しやすいため、気温が高く湿度の高い夏季は墨の生産に適していない。そのために墨は乾燥し気温が低い冬季にのみ生産が行われている。

図 1 は墨の生産過程を示している。墨造りは古来より伝わる過程と変わらず、大部分を職人による手作業で行われ、原料には煤、膠の他に麝香(じゃこう)・龍脳(りゅうのう)などの香料を用いて造られる。まず採煙の過程から始まり、次に膠を溶解する過程に入る。この採煙とは植物性の油を入れた土器に燈芯をともし、蓋についた煤を集める作業である。この作業は専用の小屋で行われ、長年手焚きの採煙法が行われていたが、近年では自動採煙機を導入する業者も現れている。この過程の後、煤と膠が混ぜ合わされ、練りの過程を経て木型に入れられ、プレスされ木型から出された後に乾燥に入る。この工程が墨造りで最も重要な過程である。乾燥は墨内部の水分を取る工程だが、急激に乾燥させると墨が割れてしまうため、長期間かけて墨を乾燥させる。まず木の灰の中で 10 日から 30 日かけてゆっくりと水分を取り、自然乾燥の工程では稲藁で編み、天井で 30 日から 100 日間空気乾燥される。全体を通すと長いものでは 1 年かけて造られるものもあり、墨造りは非常に長期間かつ多くの手間をかけて行われる。

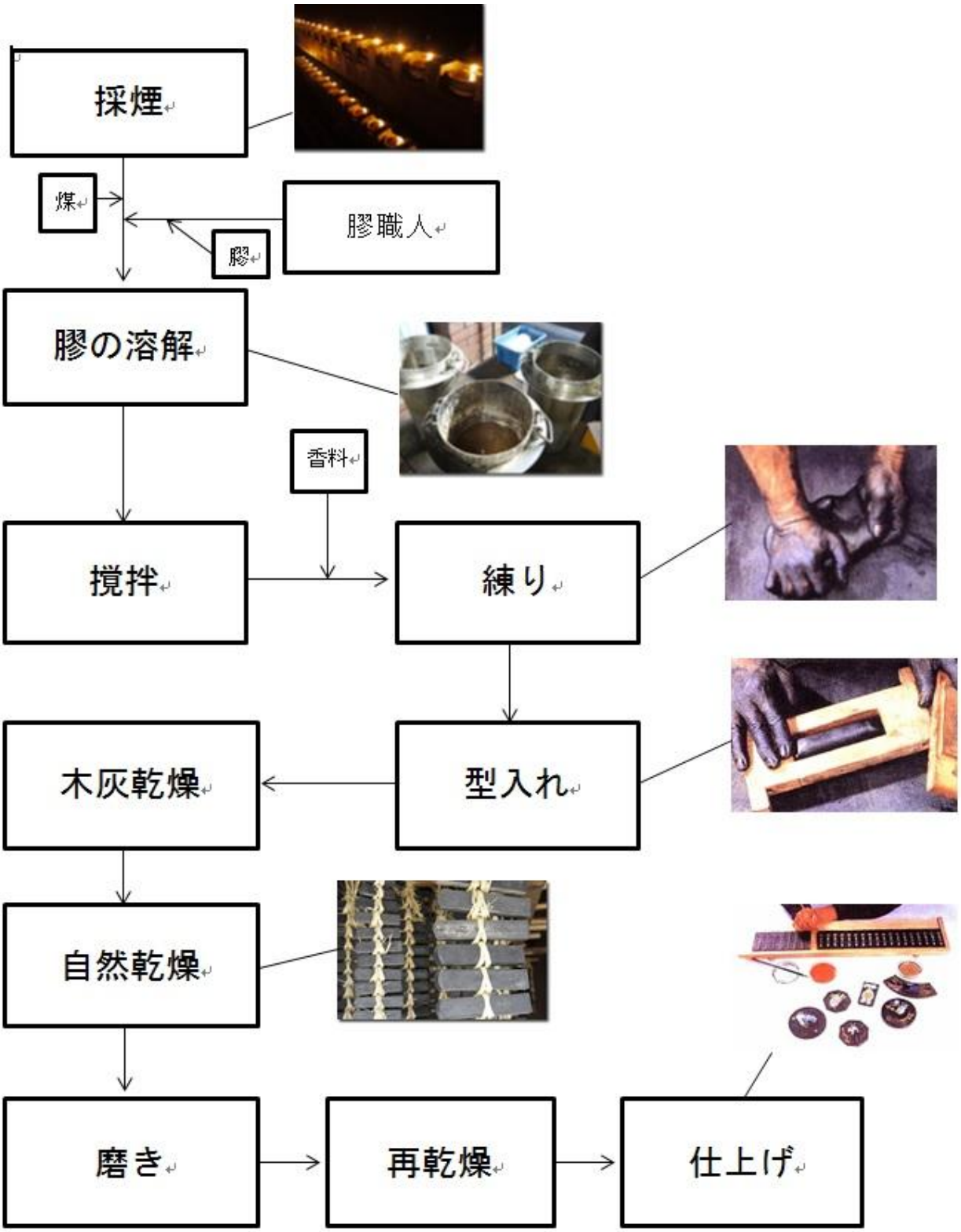

図１　墨の生産工程

（奈良製墨組合ホームページより作成）

III. 近年の製墨業の変遷・現状と今後に向けての取り組み

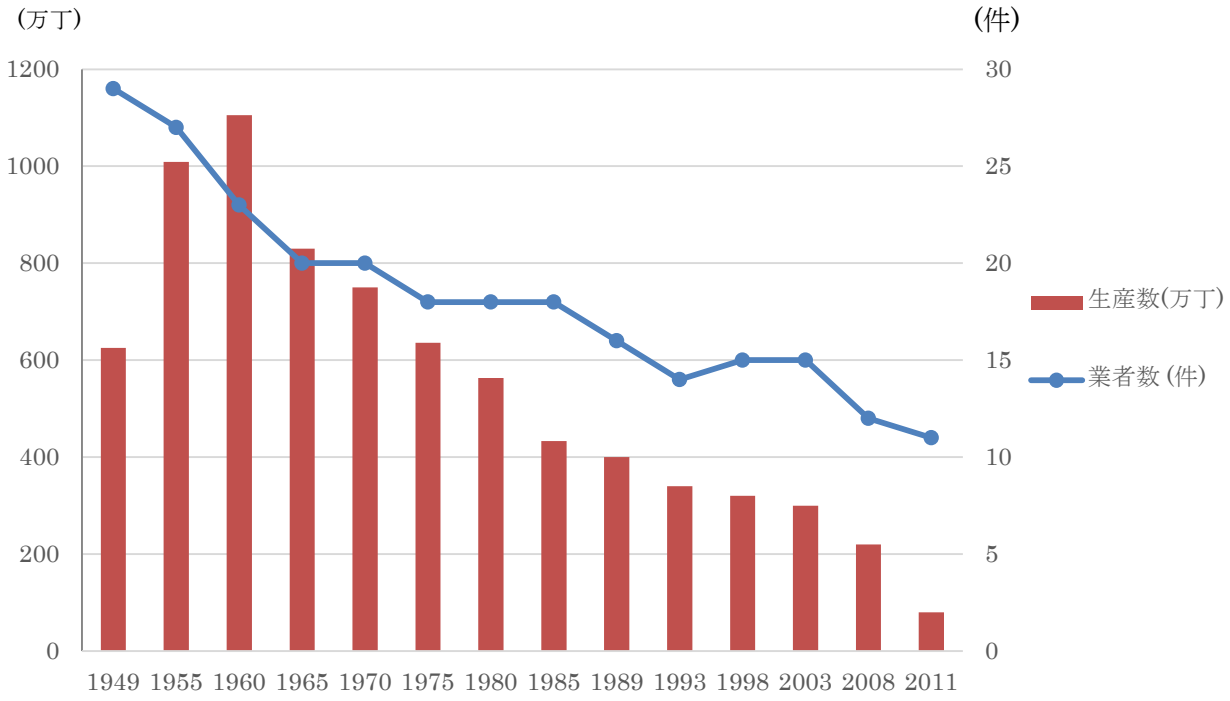

図 2 製墨業の業者数・生産数の推移

（奈良製墨組合 HP より作成）

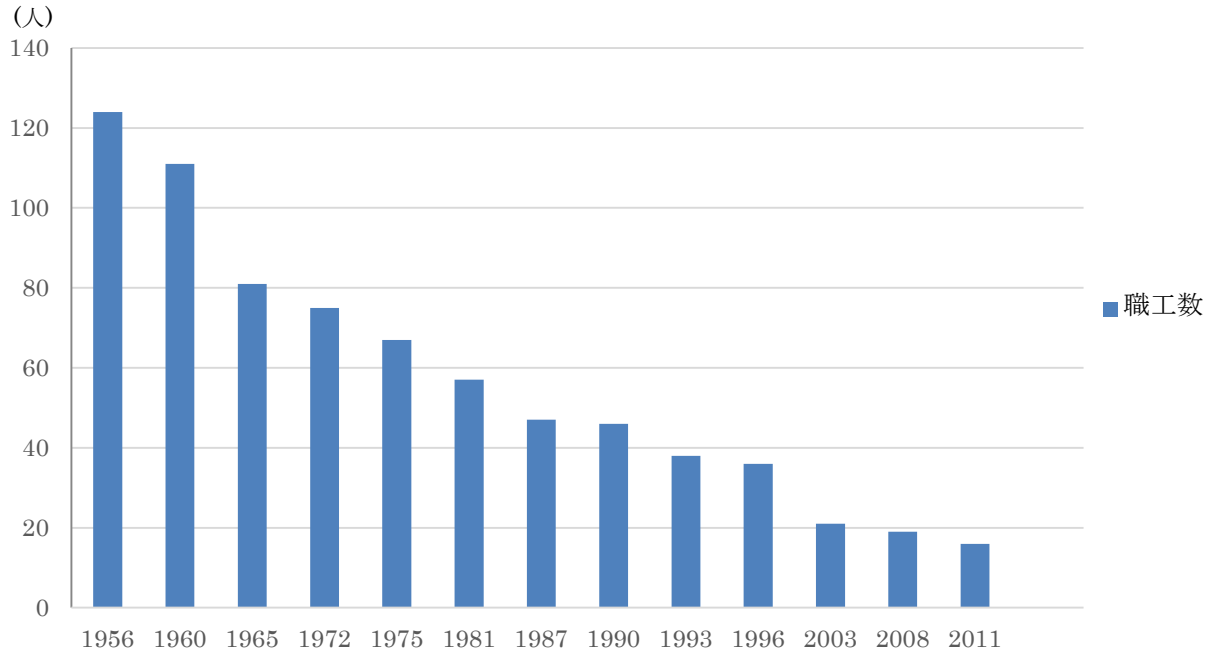

図 3　製墨業の職工数の推移

（『奈良墨の継承と和膠生産の再興』より作成）

1）近年の製墨業の変遷と現状

図 2 及び図 3 は戦後の奈良県の製墨業の業者数と生産数及び職工数の推移を示したものである。今回は 1949 年の奈良製墨工業組合の設立時から現在までのデータももとに作成した。まず 1950 年代から 60 年にかけて生産数の大幅な伸びが特徴的である。これは表 2 にあるように 1958 年に学校教育において習字が復活したことが関係していると考えられる。しかし戦後は 1960 年をピークに生産数、業者数、職工数の全てにおいて減少傾向にあることが挙げられる。これには複数の原因が考えられる。

まず一つに、固形の墨に対する純粋な需要の低下が挙げられる。近年でも学校教育において習字教育は行われているが、そこで使用されているのはほとんどが墨汁である。時間が限られる学校での授業において、時間を要する固形墨を磨って使うという習慣が無くなりつつあることが大きく影響していると考えられる。そのため現在固形墨の需要は書道家や水墨画家と言った限られた需要に留まっていると言っても過言ではない。さらに言えば、安価な海外産の墨、特に中国からの輸入は価格競争で劣る国産品を圧迫しているとも考えられる。

次に挙げられるのが職人の減少、後継者不足の問題である。墨造りは熟練した職人の技術に頼る面が大きく、また「きつい（Kitsui）」、「汚い（Kitanai）」、「危険（Kiken)の３K 業種と呼ばれる仕事の一つである点が挙げられる。職人自身の高齢化に加え採煙や練りなどの工程で生じる煤の汚れや膠から生じる臭い、さらに寒い冬季の作業を敬遠する若年層が多く、深刻な後継者難に悩まされているのが現状である。まだ既存の職人も墨造りが行われる時期のみに活動する季節労働者であり、夏場には農業や庭師等を兼業しており、兼業の方へ完全に移行してしまう例も少なくないという。また採煙の工程では専用の小屋で採煙を行う際に、体に付着した煤が小屋から出た際に風で煤が飛び、周辺の住宅から苦情が来るなどの理由で墨造りをやめてしまうという例もあるという。

図 4 は奈良市内の製墨業者の分布を 3 つの時期に分けて表した。1949 年には数多くの製墨業者が近鉄奈良駅周辺の旧市街地内にみられるが、時代を経るにつれて減少し、1983 年には特に近鉄奈良駅の北側で大きく数を減らしている。また市街地から離れた南部の郊外に立地している例も見られる。これは先に述べた要因により、旧市街地を避けた立地へと一部の業者が移動したとも考えられる。また 2011 年には旧市街地に残っていた業者も多くが無くなり、指で数える程度しか残っていないのが現状である。

第三の要因として挙げられるのは原料の入手が困難になりつつある点である。国産の原料を使用している業者では、膠の生産も減りつつあることが問題となっている。膠は動物の皮から生産することから、生産の際に生じる臭い匂いを敬遠して、膠を作る職人が減りつつあるという。膠を国外から輸入するという手もあるが、質の高い墨を作ることにおいて、国産の膠が減りつつあることは大きな問題であると言えるであろう。

ここで挙げられた需要の低下、後継者の問題は、日本全国の伝統工芸が抱える共通の問題であり、伝統工芸産業に現在重く伸し掛かっている。

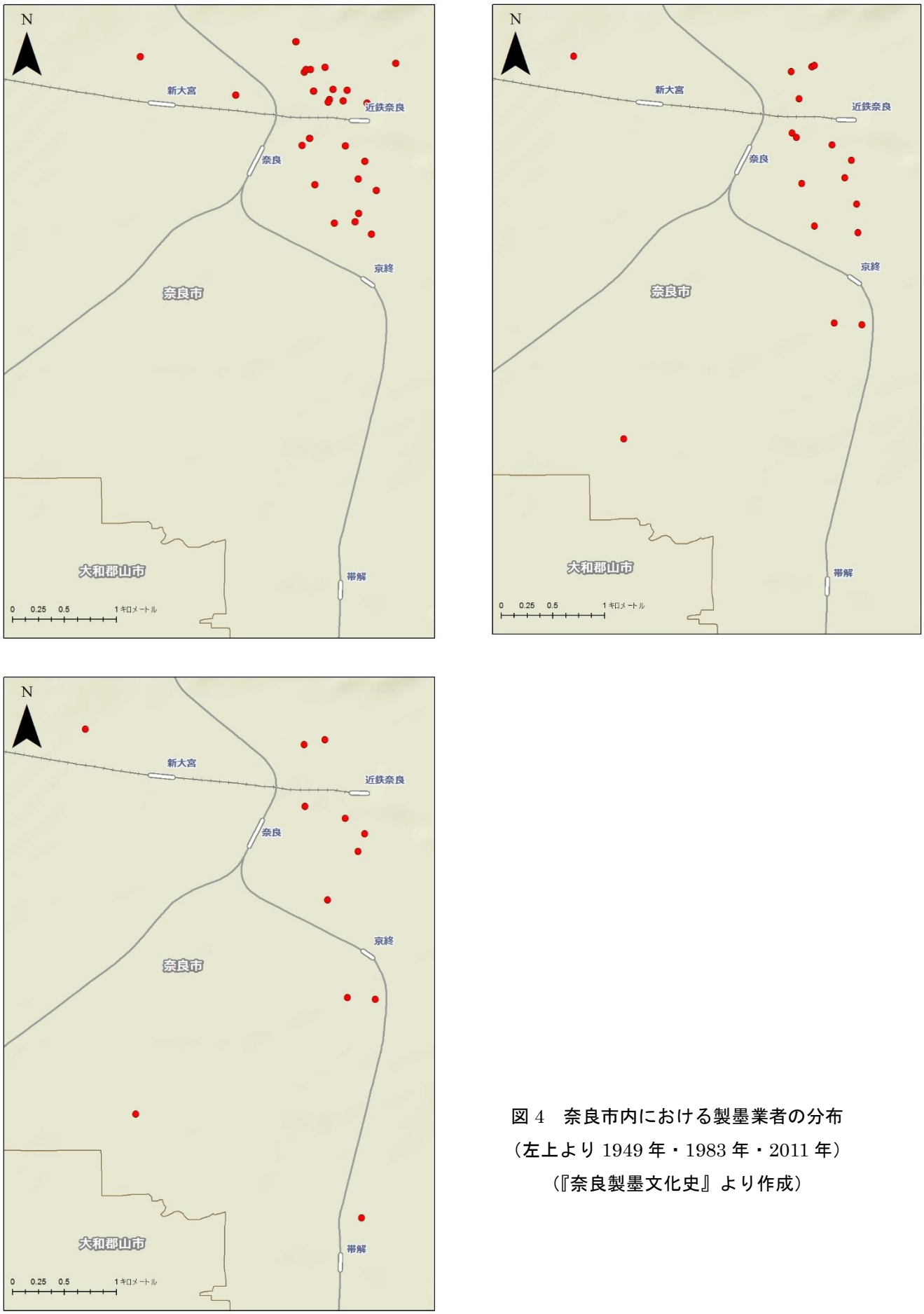

図 4　奈良市内における製墨業者の分布
（左上より 1949 年・1983 年・2011 年）
（『奈良製墨文化史』より作成）

2）製墨業者の取り組み

ではこのような固形墨の生産の現状に対して、製墨業者側はどのような取り組みをしているのであろうか。

一部の業者では、伝統的な固形の墨の生産以外にも、墨汁や書道関連の道具を製造、販売することで固形の墨に依存せず産業を維持している。また伝統的に固形の墨のみを造っている製墨業者では、小学校等で講演を行うなど若年層に墨の文化を広める活動をしている。また組合においても墨の魅力を伝えるシンポジウムの開催や DVD、パンフレットの作成を行うことなどで、墨に対する興味関心を抱いてもらうような活動を行っている。これらの取り組みにおいて重要な点としては、いかに伝統を後世につなげていくかにあると思われる。奈良県の伝統文化としての墨だけでなく、古代から我々の生活において文字を書く道具として、連綿と受け継がれてきた墨の魅力を伝えることが重要であるといえよう。

IV. おわりに

奈良市における製墨業は、墨がわが国に伝来した時から始まり、わが国の歴史と深く関係し、奈良の風土に合った形で発展を遂げてきた伝統産業である。しかし現在では墨を磨るという習慣が減ったこと等による需要の低下、重労働に対して職人の高齢化と後継者問題など今後に大きく不安を残す課題が山積している。今回聴き取り調査を行った墨屋でも将来のことは不安であるという一方で、伝統を守り後世に伝えていくことが大切だという話を伺った。全国的に見ても伝統工芸産業は同様の課題を抱えているが、一方でその伝統の魅力を広く伝えていくことが今後の伝統工芸産業にとって重要であると言える。奈良市は歴史的遺産が数多くあり観光に恵まれた土地でもある。この歴史ある街とその中で発展した熟練の技術によって造られる製墨業を今後どう守っていくか、この大きな課題にどう対処していくかが伝統産業としての墨の生き残りに繋がると考えられる。

-付記-

本稿を作成するにあたり、松壽堂の森克容氏、奈良商工会議所の澤田忠之輔氏、細田忠生氏、奈良県工芸協会の鍵田徳光氏には大変お忙しい中お世話になりました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

参考文献

安彦勘吾　1983.『奈良の筆と墨』、奈良市

奈良製墨協同組合編 2000.『奈良製墨文化史』、奈良製墨協同組合

奈良製墨組合編　2013.『奈良墨の継承と和膠生産の再興』、奈良製墨組合

奈良製墨組合ホームページ　http://www.sumi-nara.or.jp/　2011/05/11 更新

伝統的工芸品産業振興協会 2002.『全国伝統的工芸品総覧：受け継がれる日本のものづくり　平成 14 年度版』、伝統的工芸品産業振興協会

伝統的工芸品産業振興協会 2007.『全国伝統的工芸品総覧：受け継がれる日本のものづくり　平成 18 年度版』、同友館